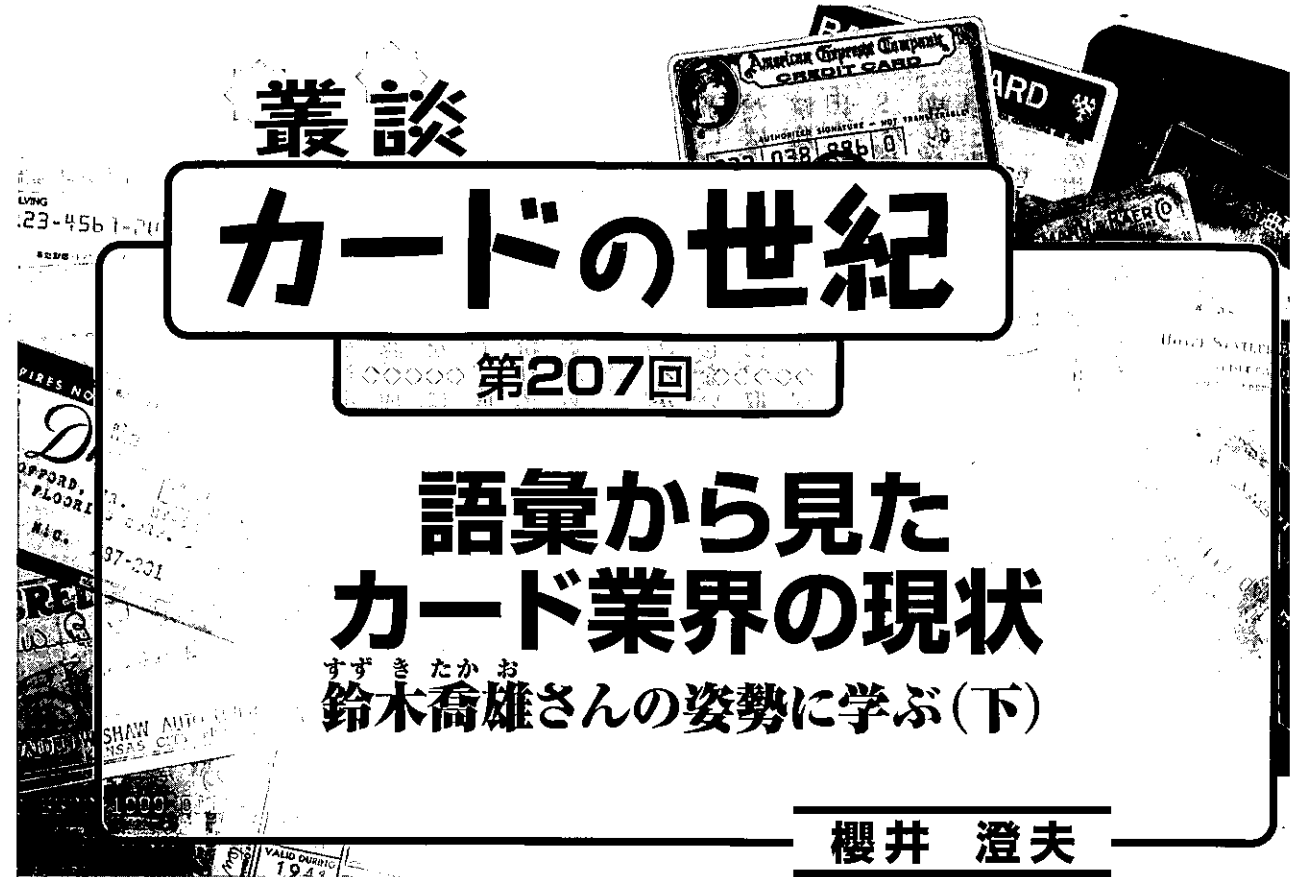




談叢 カードの世紀

第207回

語彙から見た カード業界の現状 鈴木喬雄さんの姿勢に学ぶ(下)

櫻井 澄夫

誤った情報は
社会にはびこる

鈴木喬雄さんの著書に引きずられて、この連載ではこれまで2回にわたり、私が本誌などで、関連業界での用語の乱れ、政府の広報活動や政策で使用される用語の不統一について疑問を呈してきた主張のレベルを上昇させ、もっと具体的に記述しようという気になった事情を簡単に述べてきた。

いくら本誌などで主張しても、間違った内容をいつこうに修正しようとしないう企業や人があまりに多い。おそらくは、「自社や自分が属する組織や業務について、外部の人のほうが、正しい知識、情報を持っているなどということがあっていいのだろうか」との思いもあり、外部からの指摘に耳を傾けないのであろう。

しかし、誤った情報は一度発進されると次第に社会に広まっ

ていく。業界人や企業の発言に影響を与えるだけにとどまらない。専門性の高い情報だけに、業界外部の人は業界や企業から発信された情報を無批判に真実と受け止める。一般の辞書類やテレビ、ラジオ、新聞、雑誌、書籍でも引用されたり、そのまま転載されたりするから、一般社会のこの業務に対する理解を間違ったものにしてしまい、間違った情報が国中にまん延する。

鈴木さんが主張するように、多くの有名な辞書類の実情はひどいもので、鈴木さんは職業柄、「信託預金」という言葉を例に引いているのだが、『広辞林』『広辞苑』、それにあの『日本国語大辞典』(通称「日国」、全20巻)までも語釈はだめであり、大きな辞書では「辞海」以外は全滅だそう。

第205回(2022年12月号)でもご紹介したが、鈴木さんは「どちらも、信託のことは

全く知らない人が書いた説明としか思えず、何とも理解しがたい」「編者の定見を疑わざるを得ない」「辞書編者としての頭脳を疑わなければならない」と厳しい批判をしているが、私がこの消費者信用業務やペイメントカードとは関係がない記述を見てとっさに思ったのは、私が最近対象としているような語彙の実情と同じではないか、もし鈴木さんが、私がこの連載で紹介した業界関連の辞典類を見たら、やはり同じような批評、批判をするだろうと想像したものだ。

カタカナ語の弊害を
認識すべし

本誌の読者の皆さんには、幸か不幸か「鈴木さん」はいない。しかし、現状を詳細に調べて誤用の一覧表を作成したら、本誌の読者や企業の多くの人たちが驚かれることだろう。私が気付いていない例まで知るに及

んだら、いかにこの業界の情報には間違いや適切でないものが多いか、がくぜんとするのではないか。それは想像以上の驚きであらう。

ということは、鈴木さんと私の違いは対象、業種がたまたま違っていたことと、批評する立場で「頭脳を疑う」とまで書くかどうかの違いだけだろう。鈴木さんと私の認識はそのくらい近似している。

鈴木さんの著書はそれほど分厚いものではなく、国語学者の専門書とはかなり装いを異にしているが、この人の著書が出版界にかなりの驚きをもって迎えられたことを聞くに及び、鈴木さんがもともと銀行員という意外な職業であったという情報も手伝って、その手法を学んでみようという気になったわけだ。すでに述べたように、情報の正確性、情報の伝達方法、責任の所在、勉強不足、公開された情報の長期(数十年)にわたる

修正のなさ、そしてそこにマスコミや法律家、学者の無関心(?)などが加わって、私が近年指摘しているような問題が発生しており、この業界の関係者に猛省を促したいというのが、私の偽らざる本音だ。

もっといえば、本誌掲載の文章やNHKのアナウンサーを含めて、なぜ日本語で普通に書ける、表現できるものを英語なり、カタカナ言葉で書こうとするのか。美しい日本語の文章に気品や格調を見るにつけ、カタカナ言葉にはそれが無いと感じる。

安倍元首相は『美しい日本』という本を書いたが、国会答弁などではカタカナ言葉を多用した。美しい日本には、「美しい日本語」は含まれないのか。「都民ファースト」を標ぼうする人、一般の国民を相手に外国語を多用し、「あの人のスピーチには辞書がある」とテレビ番組で指摘されていたが、庶民感

覚のある政治家ならできないだろう。「云々(うんぬん)」も「未曾有」も読めない人に、英語が必要なのか。

厚生大臣だった小泉純一郎元首相は、年寄りなどを対象とした業務に意味が分かりにくいカタカナ言葉が多いのはなぜかという、翌年の厚生白書からカタカナ言葉が確かに消えた。

英語語彙はまず
漢字に翻訳せよ

前2回で、クレジット、チャージ、キャッシング、キャッシュレス、などの言葉の定義の甘さや不徹底、そして和製漢語、和製英語というものについて書いてきた。

舶来の制度や言葉が、どのようにわが国に入ってきたのか、そのことについても大きな誤解があり、「消費者信用」「クレジットカード」「クレジットカード」も「信用カード」(「クレジットカード」)も、英語語彙を翻訳するこ

とによって誕生した言葉や制度、概念であって、既存の歴史的な日本語語彙である「信用」に「カード」がついたものではなく、たくさん語義がある「Credit」がたまたま明治期の一人(?)の日本人によって「信用」という言葉に訳されたから、クレジットカードという言葉が現在も使用されていることを知ったからだ。

重ねていうが、多くの中国人も、信用カード(信用卡)の「信用」が、英語の「Credit」からきていて、それは和製英語を経由して中国語に入ってきたことを知らない。つまり、一般の日本人と一般の中国人は共に英語→日本語(和製漢語)→中国語(和製漢語)というこの言葉の国境を越えた流入過程を知らないがゆえに、日本の各種媒体などで、「クレジットカードとは『信用』『信頼』です」などと書かれ、しまいには「クレジットカード」には「決まった定義はな

い」などと書かれるに至るわけだ。

私は、前回も述べたように一般の中国人の中に「Credit card」という英語の語彙を「信用卡」と呼ぶことに少々違和感を覚えている人がいることと、日本人や組織の間での「クレジットカード」には決まった定義がない」というような発言の不自然さには、明治期の一種の「誤訳」に基づく「誤解」が影響を与えたのではないかと思っている。

私が日本の明治期の資料や書籍を引用するのは、現状を知る上で業界用語の流入や命名の事情や過程を知ることの重要性を感じたからであり、多くの間違った記述の根源が明治期以降の文献の調査によってその事情が明らかになるからである。

同時に、今後は欧米の専門言語の導入にあたっては、発音をカタカタにするだけでなく、欧米の用語を漢字語彙に翻訳することが普通になっている中国の

実情を学ぶべきだと思っ

てい

る。中国語にはカタカナもひらがなもないから、漢字化するしかないわけで、翻訳の際は明治の日本人がやったように、英語などの用語は漢字化することによって外見としても意味として中国語化することになって、「疑似英語」や「インチキ英語」、あるいは誤訳や誤解というものも減少することになるだろう。

報や宣伝活動にも影響を与えるだろう。漢字化の目的は意味上の日本語化の推進である。

また用語の統一には業界の用語の標準化が不可欠であろうから、その努力に傾注すべきと考える。「前払い式証票」などという漢語が適切とは思わない。

明治期に「言文一致」という活動があったが、現代人が理解に苦しむ明治期の法律用語を含め、その弊害は払拭されていない。なお、あえて付記しておきたいことは、「漢語」とは日本語として使用される場合は、漢字で書かれる言葉であり、中国語では、「漢語」とは「中国語」のことである。

辞書に対する批判と思想性

政策や実務や生活で使用される言葉の、国民への伝達上の問題や齟齬については、本誌における以前の文章を補足する形で述べた。

苑では」という前置きが入るのが常であり、他のテレビ番組などでも言葉の解説をする際にはまず広辞苑の名に触れる。テレビ局や出版社などでは、広辞苑が多く利用されているのだから。

私は前号で、92年の第4版になって初めて「クレジットカード」が広辞苑に登場したと書いたが、たぶん間違いないだろう。続いて他の辞書での状況も時間をかけて調べてみたい。言い訳をすると、公共の図書館でも有名な辞書の各版をそろえているところは少ない。例えば横浜市立図書館では、各区の市立図書館を回っても、なかなか主な辞書を全て見ることはできないから、内容を簡単には比較できない。版によって書き換えられ、追加、削除もされる。

また、主な辞書には通常、数十人の執筆者がいるが、辞書を眺めまわして見たところ、たぶんこの業界のことを熟知してい

る人はいないから、記述には問題が残る。語彙の選択方法と内容の双方に疑問が残る。

そういった意味で辞書の各版を比較することには、社会の動きや社会のその業務への認知度を高めるための一種のパロメータにもなり得る要素があるが、やはり業界や業務について知識がないと、批評もしにくいだろう。

鈴木さんの手法が効果的であったのには十分な証拠と理由があるのだが、鈴木さんといえども専門分野以外の全ての語彙について検証することは困難だ。

鈴木さんは著書で「国語辞典の序文や新聞広告などには、専門語については権威ある専門家の協力を得た旨の記載があるが、この記載が私にはなんともむなしなものに思われてくる」と書いている。

限られた語彙の意味だけでなく、そういった言葉がどういった辞書にいつごろから掲載されているかについても少し触れてきた。それは、著名な辞書でどのように扱われてきたか、それが正しかったかどうかを検証することで、この業界の用語と社会との関係、つまり辞書に掲載された語彙を例として、この分野の業務がその時期の一般社会にどの程度認知されているかを知らることによって、この業界の発展の姿を明らかにすることができるかと考えたからである。

業界に関する辞書と一般の辞書を比較すれば、専門的な辞書が作られた時代の社会一般におけるある程度の認知度を測ることができる。がっかりしたことも含め、ある程度は目的を果たし得たように思う。

前2回の拙稿に対して、評価や感想をいただいた、長く大手信販会社の幹部だったMさん、いつも貴重な意見を寄せられる

広辞苑はなぜ絶対的な信用を得たか

あまり最初には持つてきたくないが、広辞苑を例にしよう。広辞苑は1955年が初版で、今でも知名度という点では第一の辞書といえるだろう。毎日のようにテレビ番組に出演する東京の予備校の講師だという「H」先生は、言葉の解説を番組上でよくするのだが、「広辞

典

正しい記述をして一般の辞書や媒体に対して範を示していただきたい。せんえつながら本誌の読者には専門家としての矜持があるだろう。

広辞苑を批評する 書籍を読んでみて

広辞苑は人気がある辞書だから、ご参考に、この辞書に関する書籍は少なくないので、いくつか目に留まった書名をあげてみよう（写真1）。

まず、最近読んだ本から。

- (1) 谷沢永一、渡部昇一著の『広辞苑の嘘』（光文社、01年）。序文に「警戒されよ、信ずるなかれ」、結びに「辞書の権威によった悪辣な所行」とあるように広辞苑批判の書。同意するかどうかは別にして読んでおもしろい。

- (2) 今野真二著の『「広辞苑」をよむ』（岩波新書、01年）はまともな書評という印象だが、日国との語彙の比較で、大きな

辞書である日国にはなく、中型の広辞苑に入っている語彙について項を作って書いているところなどは興味深い。大きな辞書は何でも書いてあるという認識が正しくないことを教えてくれる。また「ね」に始まる一部の語のみだが、広辞苑の前身の『辞苑』（35年）から広辞苑の第7版までの各版での掲載状況を付表に○×をつけているところなどは興味深い。

その中に、特に「ネットショッピング」など「ネット」を親項目とする語彙が第6版（08年）で追加項目として登場したという記述は、鈴木さんの調査などと重なる部分があるし、ペイメントカードや「クレジット」関連の項目とも比較すると、前述のように時代と共に辞書の内容も変化することの例えとしてあげられるだろう。広辞苑に「クレジットカード」が立項されたのは第4版（92年）だから、「ネット」も「クレジッ

トカード」を追いかけたことになる。なお前々号で触れたように「キャッシュレス」などの「キャッシュ」が付く語彙がいくつも登場するのは、やはり第6版からである。「ネット」や「キャッシュ」関連のまとまった数の言葉の広辞苑でお目見えした。執筆者の意思、意図が感じられる。

- (3) 高島俊男著の『お言葉ですが4 広辞苑の神話』（文春文庫、03年）は、広辞苑の事だけ書いた本ではないが、ちまたの「広辞苑の神話」をかなり皮肉って、他の辞書に比較してそれほど優れているとは思えないと高島さんが主張する広辞苑について評論している。高島さんならではの結論は、「結局、広辞苑神話は岩波神話なのでしようね」と締めくくっている。

- (4) 新村恭著の『広辞苑はなぜ生まれた——新村出の生きた軌跡』（世界思想社、05年）は広辞苑を著した新村出の孫が書い

た本。こうした著作が広辞苑という辞書がどのようにして生まれたのか、その背景を知り、同時にそこに収録されている語彙の性格を知ることにも役立つだろう。

なお、広辞苑の前身になる、戦前の辞苑は新村出が作ったが、戦後の広辞苑の作成には関与していないという見方がある。その他にも、未見だが金武伸弥による『「広辞苑」は信頼できるか』（講談社、00年）などがある。

「暮らしの手帖」の 辞書批判のインパクト

国語辞典の評価にとって鈴木さんの著書以前に辞書の業界を驚かせた本がある。71年の春に出た、「暮らしの手帖」の第10号だ（写真2）。

この本には「国語の辞書をテストする」というページを作って、手頃な価格の辞書8冊の内容を細かに比較して、厳しい内

容の検討を加えている。この本では、「新聞記事に出てくる言葉はろくすっぽ入っていない」「どうして何冊もある辞書が同じ言葉でまちがうのか」「知らない言葉は多すぎるし、ほしい言葉は落ちていくし」「百語に一語は全然間違い。二十語に一語は説明足らず」などの意見が記され、最後に「国語は国語学者だけのものではない。国語辞典を国語学者だけにまかせておいたのが、私たちの至らぬところであった」との結論を出している。

これはやはり鈴木さんの主張につながる見解だろう。



写真1 「広辞苑」に関する書籍は多い。（写真1）

「暮らしの手帖」は花森安治による創刊で、商品テストなどが世の話題となったが、おそらく国語辞典のテストは、その線に従ったものであり、こうした新しい動きが世の中を変えていくことになり、われわれもそうした成果を参考にして、業務に生かしていくべきだと思う。

「どうして何冊もある……」という疑問は、私が主張するカード業界における、クレジットカードの間違った起源神話や、日本でプラスチックカードが世界で初めて発行されたという「ガラパゴス伝説」が転載されているまだにあちこちで消えないのと



写真2 辞書の比較をした「暮らしの手帖」。（写真2）

共通しており、「全然間違い」「説明不足」なのもやはり同様であろう。

業界にはびこる インチキ英語を駆逐する

こうして私は、いわゆる和製英語について考えを示してきたわけだが、諸書に目を通して、人々が使用しているいわゆる和製英語やカタカナ言葉と呼ばれる語彙の呼び名を類似するものをも含めて広めに並べてみて、今後、もっと正しい言葉や情報に迫る態度を示してみたい。その目的は、対象となった言葉が、どれに属する言葉に近いのか、言葉の性格を考えたり、調べたりする際に、その言葉の由来、語源、変せんなどを知ることが不可欠であると思うからである。

言葉の性格が分かってくると、調べ方も絞られてくる。外国語→外来語、西洋語、疑似西洋語、疑似英語、カタカナ

言葉、インチキ語、劣化日本語、言語他殺→言語自殺、植民地言語、英語の多用、和製英語、和製漢語、伝来語、借用語、輸入語。

私の希望は、皆さんの業務関連の文章、表示、広告、広報などで、以上にあげたような語彙に属するものはないか、それが好ましいものなのか、いまい度、論議と認識を深めていただきたいということである。

そうすることにより、チャージャーズのカードとか、ポイントインチキ英語、国籍不明語をこれ以上発生させないことができれば、そうしてこそ、正確な情報の伝達が可能となるのではなからうか。国際化とは意味不明瞭の言語を国中にまき散らすことではあるまい。

今回のテーマは、大学生の卒業論文くらいにはなるかもしれない。あちこちの図書館を回らないといけないが。